



保護者や地域と連携・協働の子育て

学校における地域連携について、国・県では、「コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的な推進」を進めており、管内でも多くの市町が特色ある取組を行っています。

今回ご紹介するのは、富津市にある「社会福祉法人わこう村 和光保育園」の取組です。和光保育園は、子どもが主体的に生きる保育を大切にされています。その実現を園の中だけにとどめるのではなく、保護者や地域とともに支え合いながら育てています。子ども同士の関わりを起点に、大人たちもつながっていく。「**子コミュニティ**」と呼ぶその取り組みをご覧ください。

子どもと大人がいっしょに生活をつくっていく保育園

里山のふもと、お寺の境内に広がる和光保育園。昭和32年に四街道から兵舎の食堂を移設して開園された築128年の園舎には暮らしの場というのにびったりの穏やかな時間が流れ、開放的で居心地のよい空間が広がっています。

同園が大切にしているのは、子どもが自ら考え、選び、動き出すことです。保育者が一方的に活動を用意するのではなく、子どもとともに生活をつくりながら、「どうすればみんなが気持ちよく過ごせるか」を日々考え合う保育が実践されています。

こうした取り組みの背景には、約40年前の保育の見直しがあります。当時、「今日は何をするの?」と指示を待つ姿や、生活に必要な動作が身についていない子どもが増えていることに気づき、子どもの主体性を育む保育へと舵を切りました。

まずは、子どもがじっくり遊び込める時間を保証することからスタートしました。子どもたちは生き生きと活動するようになりましたが、一方で、片付けができずに環境が乱れたり、物が壊れたりといった課題も見えてきました。この経験から、「自由な遊びの前に、生活がある」という考えに至ります。

子どもと大人がともに生活をつくり、その中で関係性やルールを育てていく——。現在の保育は、その積み重ねの上に成り立っています。必要なものは自分たちでつくり、壊れたら修理する。そうした生活文化も大切にされています。

園とのかかわりが薄かった父親たちを巻き込む工夫

和光保育園のもう一つの特徴は、保護者とともに子育てを行う姿勢です。子育てを園だけで担うのではなく、保護者も主体として関わることで、ともに育ち合う関係を大切にしています。

かつては、子育ては母親任せで送り迎えに父親の姿は見られませんでした。そこで、園の環境づくりを手伝ってもらえないかと力仕事を呼びかけたところ、多くの父親が参加。これをきっかけに「おやじの会」が生まれました。砂場を掘り下げて造るプールや遊具の制作、さらにはおやじが焼いた大皿で子どもにお昼を食べさせるのが夢と、薪窯づくりから始めて苦節8年、とうとう皿や湯呑が焼けるようになって子どもたちが使わせてもらったり、現在も活動は広がり、園を支える大きな力となっています。

保護者が関わることで、子どもたちの姿への理解が深まり、保護者同士のつながりも生まれていきました。「こんなことをやってみたい」という提案が自然に出てくる関係性は、子育ての孤立を防ぐ大きな支えにもなっています。



おやじの会手作りの遊具。日陰で夏も涼しく遊べます。
2階奥はおやこ文庫



緑側はリフォームの際に1.8mから3.6mに延長。
お昼寝、食事、遊び場など活用の幅が広がりました。



近所の方からいただいた
森の葉を飼にして
虫を飼育



みんなでプール作り



手作りのウォーターズライダー



大人と子供がいっしょに遊びます。

保護者の声

保育園という言葉より、まさに「わこう村」という言葉がしっくりきます。暮らしの中で人としての本質を育める場所です。豊かな経験や村のみんなに貰った愛情が土台となり、自分も他者も大切にできる子に育っています。



「わいがや亭」はこの一枚から始まりました。



子どもたちの多彩な活動を 支えてくれる地域の人たち

こうした関係性は地域にも広がっています。隣接する子育て支援センター「もうひとつの家」は、保護者たちや「おやじの会」の手によってつくられた「わいがや亭」の中にあります。親子が会い、悩みを分かち合い、交流する拠点として機能しています。

また、保護者による子ども服のリユースショップも運営され、売上は施設の運営に充てられています。ここでも利用者自身が主体となり、場づくりに関わっています。

さらに、地域の人々も日常的に保育に関わっています。蚕の飼となる桑の葉を分けてもらったり、農家での収穫体験が行われたりと、子どもたちの活動は地域の暮らしと結びついています。柏餅づくりの際に葉を提供した高齢の夫婦が、子どもたちからの贈り物に涙ぐんだ——。そんなエピソードに見られるように、子どもたちの存在が地域の人々の喜びや生きがいにもつながっています。

「子コミュニティ」が育む子育ての共同体



鈴木眞廣理事長

和光保育園の実践の根底にあるのは、「子どもとともに生活をつくる」という考えです。鈴木眞廣理事長は、子どもの主体性を大切にする保育を追求するなかで、それを園の中だけで完結させるのではなく、保護者や地域とともに支え合う形で実現してきました。子ども同士の関わりを土台に、大人たちのつながりも広が



おやじの会は、クレーン車等を一切使用せず、手作業のみで展望台を完成させました。



倉庫の上にある展望台に登ることは子どもたちにとって一つの目標となっています。



子ども服のリユースショップ。1着50円は超お得!



おやじの会が作ったお豆たち

ていく——。その関係性を同園では「子コミュニティ」と呼び、大切にしています。

保育者、保護者、地域の人、それぞれが役割を担いながら関わり合い、子どもを真ん中に据えた関係が編み直されていく。そこには、一つの子育て共同体の姿があります。「自由な遊びの前に、まず生活がある」。これまでの実践の積み重ねから生まれたこの考えが、和光保育園の保育を支えています。「わこう村に行けば、面白い人たちがいて、関わると楽しい」そんな場所であり続けたい——。鈴木理事長の思いのもと、子どもを中心に人と人がつながる取り組みは、これからの地域社会における子育てのあり方を示しています。

最後に鈴木理事長が語ってくれたのは、働き手不足で定年が伸びて、一生を会社勤めで終わってしまうのではないかと心配でした。経済を回していくには、働き手の確保は重要ですが、家事育児や地域参加も出来る働き方を実現する必要がある。そこで保育園も、育児を引き受けて終わらず、家事/育児が両立できるジェンダー平等の働き方の実現に向けて、男性の育児参加や保護者との連携/協働の子育てを応援していくことが重要だと話されて取材を終えました。

和光保育園の一日

ウッドデッキではおばちゃん達の絵本読み聞かせ会が始まりました。



緑陰にはさわやかな風が流れていきます。



乳児様はごはんの時間♪



ごはんや食器を運んだり、自分たちでお座ごはんの準備をします。食器はプラスチックではなく、おえて瀬戸物を使い、物を大切にする心を学びます。



千葉県保育協議会 芝崎章吾会長から一言

和光保育園の活動は、子ども・保護者・地域がつながるコミュニティづくりの理想的な実践例であり、その基盤には質の高い保育と、保育園との厚い信頼関係があります。保育を取り巻く環境は保育の質に重点が移り、保育の専門性が一層求められています。千葉県保育協議会では、巡回支援や研修・研究大会の開催を通じて保育の質の向上に努めるとともに、保護者支援や地域との連携を充実させ、子ども一人ひとりの育ちを支えています。今後も保育所が地域コミュニティの拠点として、その役割をさらに発揮されることを期待しています。

今回、紹介した記事は、千葉県社会福祉協議会広報紙「福祉ちば」及び同会ホームページにも紹介されています。

過日、熊本で大地震が発生し、本県でも大雨による甚大な被害が出ました。被災されている方々は大変な状況の中、必死に頑張っている様子が連日報道されています。学校と地域がつながることは教育活動の充実（生きる力の育成等）に留まらず、防災の視点からも、いざというときの大きな力にもなります。今後も学校を核とした地域づくりが望まれます。